



本社の敷地内に設置されている「防災井戸」。災害時にトイレや洗浄などに使用ができる。

ダイバーシティ
女性活躍
推進企業

技術・知見は「人間性」で生きる

さく井せい技術のバイオニア企業

株式会社日さく

地下を奥深く掘り進み、井戸や温泉を築造する「さく井工事」のバイオニア企業、株式会社日さく（若林直樹社長）。同社はこの4月に創立から109年目を数える。

これまで途上国へのインフラ輸出に大きく貢献してきた同社は、ダイバーシティ推進企業として業界を先導すべく、この5年間で女性や外国人の技術者の採用と高齢者の活躍に積極的に取り組んでいる。

建設業界において女性の技術者が増えつつある昨今も、同社のような専門性の高い分野では今も、男社会、は根強い。そんな中で同社は現在、5名の管理職と13名の技術者の女性が活躍する。

多くの女性技術者が活躍できる環境を

同社では数十年前からいち早く女性の技術者を採用してきたが、結婚や「職場の環境が合わない」と数年で退職。長続きさせられなかった「過去の失敗」がある。

「社内にも社会全体にも、女性を受け入れる体制づくりができておらず、せっかくのご縁を無にってしまうという『過去の失敗』があった。『人的資源』を大切に、経営の要諦を「ヒト・ヒト・ヒト」とし共に成長することを考えました」

企業は過去の失敗と向き合うことで進化していくと話す若林社長は、女性が働きやすい環境とはどうあるべきかをしっかりと考えた上で、積極的に女性を採用。女性同士が仲間意識を育み、お互いが永続的にレベルアップしていける体制がこの5年間で少しずつ醸成されつつあるという。

「設備面においても現場で働く女性に対し細心の注意を払った上で、性別・属性を問わずどのように指導していくべきかを考えていくことが大切。指導する男性の管理職にとっても大きな勉強になっていきます」

と若林社長は語る。少子高齢化による人材不足や、ワークライフバランスへの対策を見据え、この4月

には10名の外国人エンジニアが在籍する同社。言語の「壁」は避けては通れず、それが最大の課題となっている。

会社は社員の誰一人取り残さない

「現場では安全最優先の基本事項から十分に理解できるまで、根気を持って丁寧に指導します。理解してもらえないために考え工夫すること、指導する側の教育訓練になり、やがては日本人に対する指導も進化していく。好ましい循環が生まれています」

人材の確保を目的としながら、付随して得ることが大きいと若林社長は話す。さく井事業のバイオニアとして業界を牽引する同社は、博士や技術士をはじめ延べ400名以上の有資格者が在籍するスペシャリスト集団だが、若林社長はこのように言う。

「知識や能力があるだけでは企業人としては失格で、何事も解決できない。基本となる『人間性』があってこそ人は実力を発揮できる」

同社はSDGsへの取り組みとして「自分にプラスになることが企業価値向上や社会貢献につながる」ことを一つのコンセプトに掲げる。

「今後、5年〜10年をかけて省力化を図るべくAIやIoTの導入を進めていく中で『会社は社員誰一人取り残さない』という明確な意思表示のもと、全員が地道に取り組んでまいります」と若林社長は語る。



若林 直樹 社長

株式会社日さく
本社 埼玉県さいたま市大宮区
桜木町4-1-9-3
☎ 0486443911
設立 1912年4月
資本金 11億円
従業員数 270名
売上高 49億5621万円
事業内容 さく井工事、井戸メンテナンス、特殊土木工事、地下水関連設備工事、井戸用設備製造・販売、地質調査、建設コンサルタン、海外事業、技術開発
<https://www.nissaku.co.jp>